

幸福度とは

第二特別調査室長

いがらし よしろう
五十嵐 吉郎

国民生活・経済に関する調査会は、「幸福度の高い社会の構築」をテーマとして調査を行ってきた。3年前の調査開始当初は、「幸福度」という言葉は、まだなじみの薄いものだった。しかし、昨今では、新聞や雑誌などが、幸福度について取り上げるようになってきており、また、政府も昨年12月の「新成長戦略（基本方針）」の中で「国民の『幸福度』を表す新たな指標を開発し、その向上に向けた取組を行う」とするなど、幸福度は注目され始めている。

「幸福度」とは、簡単に言えば、幸福の程度である。それでは、「幸せ」や「幸福感」といった一人ひとりの心に関わる主観的なものの程度を、どのように調べるのかといえ、アンケート調査で個々人に尋ねる方法がとられている。例えば『『とても幸せ』を10点、『とても不幸』を0点として、あなたはどの程度幸せだと感じていますか』という設問に答えてもらい、回答者の主観的判断を、その人の「幸福度」とするのである。この方法で平成20年12月に行った「幸福度に関する意識調査」(参議院事務局委託調査)では、その平均は6.04点、基準となる5点以上の回答をした者が81.6%であった。ちなみに、政府が本年3月に行った調査では、幸福度の平均は6.47点であり、5点以上の回答をした者が85.4%という結果になっている。両調査からは、まあまあ以上に「幸せ」と感じている人が大多数を占めているようである。

しかし、一方で、幸福度の国際比較を見ると、我が国は、「世界価値観調査」では97か国中43位、オランダのエラスムス大学の調査では148か国中59位、イギリスのレスター大学の調査では178か国中90位と、中位程度のところに位置し、先進国では最下位とも言える結果となっており、どこか幸福を感じにくいところがあるようである。

我が国は、戦後、欧米に追い付き追い越せと経済発展をしてきた。経済力は国力や生活の基盤であり、その重要性は言うまでもないが、経済的な合理性や効率性、利便性に力点が置かれがちになる中で、「幸せとは何か」、「何が幸せか」ということには、あまり関心が払われてこなかったようにも思われる。「幸せはお金では買えない」と言われる。幸福は、生活の多様な側面が様々に影響し合う中から生まれるということなのであろう。「幸福度に関する意識調査」の中の「現在の生活でどのような時に最も満足感・充実感を感じますか」という設問に対する自由記述による回答では、「家族・家庭」、「仕事」、「趣味・娯楽」、「子供」、「人間関係」、「健康」の順で記述が多く、これらが生活の質(QOL)の大きな要因であることを示している。

幸福度の観点から、国、地方公共団体の施策、地域社会、NPO等の活動、そして家庭、個々人の暮らしを考えてみると、いろいろなことが見えてくるように思われる。